校長室だより～燦燦～ №２６９

ネクストワンその２

2021.1.13

その先生が、「こうしてみたいのですが、どうでしょうか」と言うと、私は「ああ、なるほどね。たぶん、そうやるとこうなると思うよ」「こうやってみたら」と返す。すると、その先生は、「ええ、そうなんですか。こわくてできません」という反応になる。

自分では、授業を変えようと、頭ではわかっていても、実際に変えるとなると、なかなか勇気がいることである。それだけ、経験年数とともに、自分のスタイルが固まってきてしまっているということである。そのスタイルを捨てるのは、容易なことではない。

いろいろ話しているうちに、広がりすぎてわからなくなってしまいそうになり、校長室にあるホワイトボードに書きながら話をするようになった。「ホワイトボードミーティング」である。これがよかった。その先生は、一度学校に戻り、数日後に授業プランをまとめて、またやってきた。その際は、記入したままのホワイトボードを使うとスムーズにいくのである。

二人で話しているうちに、その先生は「わかりました。やってみます」となり、授業を行うことになった。本人としては、思い切ったのかもしれないが、生徒が生き生きと自分たちの考えを述べ、生徒がたくさん考える授業を展開していた。一度、このような授業を経験すると、先生も生徒も変わっていく。授業後に、その先生は、自分の授業に感動しているふうであった。自分でも驚いたようである。生徒は、このような授業を待ち望んでいたのである。

３つめは、中教研県大会国語部会の授業者とのやりとりである。授業者のうちのお一人は、センター研修のリピーターのような方なので、以前から知っていた。なおかつ、以前に、その先生の授業を参観し、指導助言までしていた。その方は、センターには来るし、本は読むし、熱心な先生であった。

ちょうど「アクティブ・ラーニング」が学校現場にも降りてきた頃である。授業を参観した。最初の「あかねこ漢字スキル」の５分間の指導は見事であった。切れ味よく指示を出していく。生徒もそれについていく。しかし、その後は、生徒が文章を読み取るのではなく、教師の解説であった。解説の合間に、一問一答型の発問が出され、指名された生徒が答えるというものだった。

授業後半にグループにはなったが、話し合いではなく、順番に自分の考えを述べて終わりであった。「気づく・引き出す」はもちろん「教える」要素でさえ少ない授業であった。

事後の協議会のために、その先生が用意した資料はよくできていた。勉強したあとが見えるものだった。研究協議で、私は、「先生はよく勉強しているし、資料もすばらしい。しかし、授業はアクティブ・ラーニングではない。先生には、会津地区のアクティブ・ラーニングの先導者となってほしい」という話をした。

その先生は怖がっていた。発問をして、生徒からいろいろな考えが出されると、そこからどうしていいかわからないのである。グループにしても、どうやって話し合わせたらいいのかわからないのである。

その先生の弱点を見つけた。教材研究・教材分析ができないのである。聞いてみると、やり方を教わったことがないし、やったことがないと言うのである。経験２０年以上のベテランにして、この状態である。教材研究なくして、生徒の考えを引き出し、それを教師がコーディネートするということは至難の業である。

この時点では、この先生が翌年の県大会授業者とは決まってはいなかった。早速、授業で扱った教材を使って、教材の読み取りを少しやってみたが、そもそも教師の読みがずれていた。「本当にやったことがないんだな」と思った。

この先生の県大会の授業は、１年前に私が見た授業とは別物であった。熱心なこの先生は、何回も何回も指導案や教材研究の結果をメールで私に送ってきた。電話でも何回も話をした。仕方がないので、私が会津まで出かけたこともある。それこそ頭が下がるくらいであった。

もともと熱心なので、ベクトルが正常な方向を向き、何をやるのかとそのやり方がわかれば、どんどん変わっていくと言うことである。この先生の一番の授業は、間違いなく「ネクストワン」である。